

鏡像に見る真実と未来論 A Mirror of Truth and Future

清水 利宏

SHIMIZU Toshihiro

Abstract: This paper describes a search for a practical step to a new solution for future human prosperity by exploring and looking closely in a nearby mirror. It starts by exploding some of our preconceptions. It states that a mirror does reflect the true spirits of people. The significance of the “mirror room” in Japanese traditional *Noh* theaters also backs up this viewpoint. By analyzing the reasons why people should pay close attention to every single moment in life, this paper focuses on one of the controversial issues of today: materialism. In conclusion, it is stated that our every action in life, daily, hourly and by the minute, will eventually make a positive difference for the human race in the future.

Keywords: 鏡像、真実、未来、能、精神、物質、発展、豊かさ、mirror, truth, future, *Noh* theatre, human evolution, creation of harmony,

1. はじめに

朝起きて鏡を見れば、そこにはいつもの自分が映る。この瞬間の「いつもの」とは、何と比較して「いつもの」だと感じるのか。そんなことを考えるために毎朝鏡の前に立つ人は少ないだろう。よほど顔色が悪いような異常がなければ、おそらく自分自身の日々の変化にすら気付くことはない。それほどに人々は、鏡像の中のいつもの日常を見慣れてしまっている。一方、書店へ出向けばこうした「いつもの日常」から脱却するための指南書がずらりと並んでいる。それらは自己研鑽の書であったり、精神書であったりと内容は様々だが、そのどれもが自分自身の成長を目指そうとしていることに違いはない。

人々の姿を映し続ける無機質な鏡に向かい、筆者は改めてみずからの「いつもの日常」を見つめてみる。その鏡が我々に語りかけることは何か。そして、いつもの日常の中で日々意識すべき自己研鑽とは何なのか。この考察は、鏡とその鏡像から見えてくる様々な価値

観を見つめなおし、人々が発展的に生きていくための視点を、ひとつの提言としてまとめたものである。

2. 鏡が映す「真実」 - 何が真(まこと)か

我々は、常に多種多様な先入観を携えて生きている。それらは行動や学習によって得たものであるかもしれないし、単なる伝聞によるものかもしれない。たとえばこの考察で採り上げる「鏡」も、そうした先入観を免れない。鏡は「真実を映す物体」であると一般的には理解されている。しかし同時に、「鏡像は左右が逆なので真実ではない」という議論もある。まずここで重要なのは、「こうした相反する理解は、実は先入観や既成概念を伴った価値判断によるものではないか」と疑ってみることである。

たとえば鏡の前に立ち、左手にコップを持つ。すると、鏡像では右手に持っているように見えるので、この意味で鏡像は「真実」ではなさそうだ。ところが、同じ状況で「鏡像の人物が手に持っているものは何か」と尋ねてみる。すると、その答えはコップであり、その意味では鏡像は「真実」を映しているということになる。同様に、たとえば鏡に正対して右腕を挙げた時、「左右どちらの腕を挙げているか」という聞き方と、「東西南北どちらの方角の手が挙げられているか」という聞き方では、鏡像が真実かどうかの問いに対して相反する結果がもたらされる。ここで鏡が教えてくれることは、物事が真実かどうかの価値判断とは、その現象をどのような視点でとらえるかによって、大きく異なってくるという事実である。ここでの例は、いわば「物理的な視点」でとらえた鏡像の真偽性の議論だが、ここでまず筆者が述べておくべきことは、人は常にある前提的な基準や先入観をもとに物事を判断しようとする傾向があるということだ。しかも、その「基準」は個人個人で違う場合もあるだろうし、地域によって違う場合もある。より大きな視点で考えてみれば、ひとつの物事に対する価値判断の基準とは、民族によって、文化によって、国によって、それぞれ大きく異なってくるのも当然なのである。

ところで、出勤や登校前に身支度をやる者なら、誰しも毎朝一度は鏡を見るだろう。洗顔や化粧の際にも鏡は欠かせないし、身なりの仕上げには姿見が必須だ。姿見の鏡に全身を映し、最後の仕上げで身なりを整える。この瞬間の凜とした緊張感は、鏡がもたらす重要な要素といえるだろう。百科事典には「鏡は姿見の道具としてだけでなく、宗教的な呪力をもつという考え方から古くから用いられていた」¹⁾との定義があるように、鏡には、自らを映して律する「気の緊張感」をもたらす効果があることを、我々は経験的に覚えて

いる。

日本の伝統芸能である能もまた、「鏡」とのかかわりは深い。能舞台奥に掲げられた松の絵柄の板を「鏡板」と呼ぶことに加え、能舞台左手幕の奥には「鏡の間」と呼ばれる独特の空間がある。この「鏡の間」では役者が装束を準備して出番を待ち、鏡の前での緊張感が漂う。この瞬間の感覚を、能楽師・津村禮次郎は次のように描写している。

いよいよこの世の別れというか、戦場に臨む武将のような心持ちになる。孤独との戦いが始まる。もう後には引けない、一瞬そんな気分になる。²⁾

能の舞台は、この鏡の前の張り詰めた緊張感から始まる。一瞬の緊張に包まれた人間が、鏡の中の自分と対話をする。鏡が、その鏡像の中に「真実の精神」を映す瞬間がここにある。前述のコップの例が「物理的な視点」による議論だとするならば、これは「精神的な視点」でとらえた、鏡が持つ「呪力」¹⁾の一端だと言えるのかもしれない。

一方で、同じく能楽師・観世清和は、舞い終えたのちに「鏡の間」に戻る際の心境をこう綴っている。

やがて鏡の間に入ります。ここでシテ（中心となる役）は後見に導かれて大鏡の前に立ち、もう一度、自分の姿を見るのです。おのれが一体どんな姿で舞っていたのか、もう一度自分を見る。それが決まりです。³⁾（カッコ内筆者註）

出番前の緊張と終了後の回顧。一枚の鏡を前に、ここまでの深い情緒に触れると、前述の「鏡は真実を映すか」という物理的な議論がいかにか表層的なものかと感じられる。鏡の間の鏡が映すものは、物理的な物体ではなく、鏡像に宿る精神そのものである。これこそが常に鏡が映し続ける明らかな「真実」であり、前述の「鏡は呪力を持つ」という定義¹⁾にふさわしく、鏡が鏡たるゆえんがあると言えるだろう。

3. 鏡に映る「時空」と未来 - 合わせ鏡が映すもの

前章では、鏡像が真実かどうかの価値観は、人それぞれの先入観や人生観によって左右されること、そして鏡が映す明らかな真実とは、その鏡像に映る「精神そのもの」であることを述べた。ではそうした思いを胸に、あらためて自身の姿を鏡に映して考えてみるこ

とにする。次に筆者が注目したいのは、その鏡像が「いつの自分自身」を映し出しているか、という時空的な視点である。

「鏡に映るあなたはいつのあなたですか」と尋ねられて、「今の自分に決まっているじゃないですか」という平凡な問答は、ここでは避けることにしたい。賢明な批判を承知で筆者が述べるなら、鏡に映っている姿は「すでに一瞬前の過去の姿」なのではないだろうか。鏡は確かに現在の姿を映しているように見える。しかし、(第2章で述べたように)それも我々が創り出した、単なる先入観のひとつにすぎないのかもしれない、という懐疑的な視点を大切にしてみたいのだ。

たとえば「合わせ鏡」は、鏡が持つ時空的な視点を考えるための良い素材となる。まず、2枚の鏡の鏡面を正対させて合わせ鏡を作り、その中央に立つ。するとそこには無限に続く自分の姿が映る。この状態で右腕を挙げれば、それにつれて無限に右腕が挙がりだす。その現象を「AとBの2枚の鏡が交互に像を映し出した結果」と仮定すると、A B両面が交互に像を映しあって、その一瞬一瞬の時間軸の反映によって像が連続投影されているという仮説が成り立つ。つまり、その仮説のもとでは、一番手前にある像が最も過去の姿であり、その先に続くのは無限の未来像(結果像)となる。ここで「仮説」と記す理由は、筆者がこの理論に何の科学的検証を求めているからであるが、筆者はこのような仮説が新しい価値観への気づきを芽生えさせてくれることを願っている。鏡というものが反射する像を映している以上、その鏡像は「わずかな一瞬という時間を既に旅した自分の姿」なのではないか、という疑問を投げかけてみたいのだ。その上で、普段何気なく過ごしがちな一瞬という過去と向き合う。そして今という一瞬を生きている自分と向き合う。そうした価値観に触れるとき、ひと組の合わせ鏡は、今という瞬間がその先の無限の未来の姿を映し出していることを我々に教えてくれるはずだ。

無限の未来について論じるにあたり、ここで、ルコント・デュ・ヌイ著『人間の運命』より、以下の一節を引用したい。

わたしたちが、もしも進化という考え方を受け入れるなら、世界のはじまり以来、進化がおおむね上昇の道をたどり、つねに同じ方向をめざしてきたことを認めなければならない。⁴⁾

この言葉の意味を考えると、前述の合わせ鏡の「無限の鏡像」をここに照らし合わせて

みたい。世界の誕生から現在に至るまで、そのたゆまぬ進化は、まるで合わせ鏡に映された一瞬の積み重ねのように連続して現在へと続いている。永遠に続いてきたその反射像は、どれひとつとも欠けることはなく、互いに進化を映し続けてきた。この尊さを我々は忘れてはならない。さらに、その合わせ鏡が我々に教えていることは、未来の鏡像のゆくえは、現在という一瞬を生きる我々に委ねられているということである。いま我々がその進化の歩みを止めてしまえば、たちまちその先にある未来の進化も停止する。それはまるで合わせ鏡の中央におかれた現代人のように、そのすべての挙動が永遠に続く未来の姿への「第一歩」となっている。また同時に、この「現在という時間」にたどりつくまでに、数え切れないほどの人々の「第一歩」が、我々人類を今ここへと導いてきたことを忘れてはならないだろう。

本章では、「鏡に映った自分はすでに過去の自分である」という大胆な視点で既成概念の枠を越え、新鮮なものの見方を提言した。次に合わせ鏡の例を引き、今を生きる我々の像が永遠に続く未来の像へと続くことを述べた。ここで重要なことは、我々は何気なく意味の無い一瞬一瞬を積み重ねることから脱却しなければならないということである。鏡が教える「一瞬」という時間の重さを心に刻み、ルコント・デュ・ヌイが語るように、我々は永遠に続く上昇的進化の中を生きていることに対する自覚が求められている。合わせ鏡の中央で、右腕を挙げて進化を宣言する現在の我々が、今その手を降ろすようなことがあるならば、その姿を果てしなく反映し続ける永遠かつ無数の未来像は、すべてが「進化の右腕」を一瞬にして降ろしてしまうのである。

4. 人間の進化を映す「鏡」 - 物質至上主義への警鐘

ところで、現代人にとっての「進化」とは何だろうか。ここでまた、実際に鏡に向かって、自身に問いかけてみることにする。その具体的な答えはどうか、回答はすべて前向きなものであるべきだ。なぜなら前述のように、その現在の気持ちが一瞬先の自分に影響を与え、明日の自分に影響を与え、ひいては未来の自分に影響をあたえることになるからである。ではなぜ「実際に鏡に向かって」と筆者は言うのか。それは、そこに映る「真実」、すなわち鏡像そのものではなく、自分自身の「精神」と向かい合う必要があるからだ。既述のとおり、鏡が映し出す確かな真実とは、その鏡像の中に映し出される精神であり、鏡像という表層的な物質そのものではない。鏡に映し出される「精神」と「物質」。この2者に、いわゆる「精神論と物質論」という対比を重ね合わせて観察してみれば、皮肉にも

現代を取り巻く社会への提言を暗示していることに気付かされる。

さきほど筆者は「実際に鏡に向かって」と述べたが、こうして鏡に語りかけるということはつまり、鏡の中の自己の精神と対話をするということに他ならない。筆者の手許にはニール・ドナルド・ウォルシュ著『神との対話』という書があるが、(同書では「神」という言葉が用いられているが、これは実際の神仏的な「神」ではなく「自己との対話」を意味するととらえられる。)ここで著者は、物質論的欲求が人間的進化の妨げとなることを次のように述べている。

「もっと良い人生」は、物質を集めても実現できない。ほとんどのひとはそのことを知っているし、わかっていると口では言うが、あなたがたの人生は - それに人生を動かしている意思決定は - たいてい「物質」中心で、ほかの何よりも「物質」を大事にしている。(中略)世界にあるものをすべて手に入れたいということがインセンティブになっているから、世界はつねに闘争の場になる。⁵⁾

筆者はここで世界闘争について議論するつもりはない。しかしながら、合わせ鏡の考察をもとに現在の行動が未来の進化を決定付けることを再認識した今、物質追求型の思想からの脱却が求められている現状を、人々は意識すべきではないだろうか。前出の『人間の運命』にも、同様の記述を見つけることができる。

進化と結びついて進化を継続させていくことが可能な真の人的進歩とは、人間自身の完成と改善の中にあり、人が使う道具の改良や物質的な幸福の増大の中にあるのではない。このような物質主義的な態度は、人間に対する侮辱だ。⁶⁾

この「進化と結びついて進化を継続させていく」という記述は、いみじくも筆者の言う「合わせ鏡の考察」に符合する。我々は、今まさにその合わせ鏡の中央に立たされた、人類進化の指揮者であり先導者である自覚を忘れてはならない。現代そのものが「過去からの合わせ鏡の発展でたどりついた通過点」として考えるなら、いま我々が未来に対して下す決断の責任はさらに大きくなる。重ねて、作家・批評家の石川達三はこう警告する。

物質的な繁栄のかげで人間の心は滅茶滅茶にされつつある。(中略)現在の繁栄に、

どこかでブレーキをかけて、もう少し本気になって人間の精神の回復を考えなくては、繁栄の底で人民がほろびてしまう。⁷⁾

これら3つの書が述べる共通点は単なる偶然か。いや、そうではないはずだ。鏡が語りかけることと、我々が未来を決めること。その意義をもう一度振り返る時が確かに訪れている。今を生きる我々が、一瞬一瞬の重みを自覚し、鏡の中に人々の進化の意味を問う。そして、果て無き物質闘争から距離を置き、皆が人類永遠の進化の潮流に生きていることに目覚める。これは誰に語りかける必要もなく、恥ずかしいと思う必要もない。すべては鏡に向かった「自己との対話」から始めればよいことである。鏡はいつも自身にとっての真(まこと)である「真実の精神」を映し出してくれるはずだ。

5. 平凡な「いつも」からの脱却 - 発展的進化のために

鏡がもたらす緊張感、精神という真実を映す鏡、一瞬の時の重さ、合わせ鏡の過去・現在・未来、そして物質論と精神論。鏡は、実に多くのことを我々に気付かせてくれている。忙しいと言いながら、いつの間にか「忙しい」が言い訳となっている現代人は、鏡と向かい合う自己との対話を忘れてしている。そんな無機質な瞬間を積み重ねる空間には、能舞台の「鏡の間」に存在する精神の緊張感や回顧の念など、存在することはありえない。筆者自身も含めて、人々はもっと、自分自身と対話をする必要がある。

人々が真実を判断する際、その基準が先入観であったり既成概念であることを鏡は教えてくれた。では今、その鏡で現代社会を映してみるとどうだろうか。自分と友人。田舎と都会。日本とアメリカ。東洋と西洋。経済大国と発展途上国など。そうやって社会に鏡をかざしてみれば、そこには様々な文化や人々の価値観が複雑に映し出されてくる。その時に我々が重んじなければならないのは、映し出された文化や思想といった表面的な相違比較ではなく、その鏡に映る真実、つまり「人間としての進化を願う共通の精神」の尊さである。そこには比較も優劣も存在しない。存在するのは、永遠の人間の進化を目指す人類共通の精神と、それを繰り返し映し続けるひと組の「合わせ鏡」だけだ。その合わせ鏡の中央に立つのは、まぎれもなく今という瞬間を生きる我々である。永遠に続く鏡の中の未来。我々はいま、堂々とその「進化の右腕」を挙げるべく一瞬を生きている。

人類に繁栄を体感させてきたはずの物質的豊かさと、それを支える近代科学。果てしなく長い人類の歴史のなかで、合わせ鏡のごとくたゆまぬ発展を重ねてきた科学の意義につ

いて、伊東俊太郎は次のような言葉で我々に覚醒を呼びかける。

科学は人間的な営為として、いかなる時代にもその営為を価値づけるエートス(価値志向)なしにはありえなかった。近代科学をつくりあげたエートスはすでに雲散霧消し、非西欧諸国が当初目的とした「富国強兵」もその期を脱し、しかも科学が他の文化価値から孤立して「科学としての科学」になったとすれば、この現代科学の行為を支えているエートスは一体、何なのだろうか。⁸⁾ (カッコ内筆者註)

また、アメリカの文明批評家・ジェレミー・リフキンは、自身の著で思いを述べ、それを竹内均⁹⁾はこう訳した。

歴史を通じて、あらゆる文化は“世界的な観点に立ち、人間はどのように行動すべきか？”という問いに取り組みざるをえなくなっている。(中略)われわれが宇宙的な意味で愛を論じるときは、深い一体感のことを言っているのもあって、それによって、われわれは生命そのものの生成過程たる絶対的な流れとは、切っても切り離すことのできない存在であることを知らされるのである。¹⁰⁾

我々人類が目指すべき、発展的進化や生きる目的とは一体何なのか。そうした自己への問いかけを忘れたとき、そしてその認識を誤ったとき、人類の進化を映し続けるはずの鏡は、一瞬のうちに崩れ去ってしまう。それは決して、永遠に許され、また取り返されることはない。

明日の朝、鏡に映る自分の姿が、冒頭の「いつもの自分」であってはならない。日々、鏡に映る自己とその精神との対話をするところこそ、書店に並ぶ自己研鑽書を越えうるほどの、大いなる進化への具体的挑戦である。またそれは同時に、平和で、精神的に豊かな、人間の永続的進化と発展への、貴重な第一歩となりえるに違いない。

全ての生あるものがその「生」を享受し全うしうる調和を創造すること。¹¹⁾

そのための確かな礎となれるよう、筆者みずから、たくましい「一瞬」が続く未来への歩み始める決意を、ここで新たにするとこである。今を生きる人類すべての一瞬という

瞬間は、まさに未来へとつながる人類の鏡像となっている。

【 註 】

- 1) 平凡社編集『百科事典 マイペディア』平凡社地図出版、2003年
- 2) 津村禮次郎『能がわかる 100 のキーワード』小学館、2001年、p.159
- 3) 観世清和『一期初心』淡交社、2000年、p.84
- 4) ルコント・デュ・ヌイ著(渡部昇一訳)『人間の運命』
(*Human Destiny*)、三笠書房、1999年、p.129
- 5) ニール・ドナルド・ウォルシュ著(吉田利子訳)『神との対話』
(*Conversations with God book2*)、サンマーク出版、1998年、p.259
- 6) 前出『人間の運命』p.203
- 7) 石川達三『現代の考え方と生き方』大和書房、1971年、p.49
- 8) 伊東俊太郎『比較文明』東京大学出版会、1985年、p.116
- 9) たけうちひとし。東大名誉教授、科学誌『ニュートン』編集長。1921年生まれ。
- 10) ジェレミー・リフキン著(竹内均訳)『エントロピーの法則 - 21世紀文明観の
基礎』(*ENTROPY - A New World View*)、祥伝社、1982年、p.273
- 11) 国際融合文化学会(ISHCC)「モットー」より

【 参考文献 】

- 天野文雄『現代能楽講義』大阪大学出版会、2004年
- 石川達三『現代の考え方と生き方』大和書房、1971年
- 伊東俊太郎『比較文明』東京大学出版会、1985年
- 上田邦義、*Noh Adaptation of Shakespeare*、北星堂書店、2001年
- エリザベス・キューブラ・ロス著(伊藤ちぐさ訳)『死後の真実』
(*On Life After Death*)、日本教文社、1995年
- 表章 加藤周一『世阿弥 禅竹』岩波書店、1974年
- 金関猛『能と精神分析』平凡社、1999年
- 観世清和『一期初心』淡交社、2000年
- ジェームス・レッドフィールド著(山川紘矢・山川亜希子訳)『聖なる予言』

- (*The Celestine Prophecy*)、角川文庫、1996年
- ジェレミー・リフキン著(竹内均訳)『エントロピーの法則 - 21世紀文明観の基礎』
(*ENTROPY - A New World View*)、祥伝社、1982年
- 多田富雄『脳の中の能舞台』新潮社、2001年
- 種田道一『能と茶の湯』淡交社、2002年
- 津村禮次郎『能がわかる100のキーワード』小学館、2001年
- トマス・インモース著(尾崎賢治訳)『変わらざる民族』南窓社、1972年
- ニール・ドナルド・ウォルシュ著(吉田利子訳)『神との対話』
(*Conversations with God book2*)、サンマーク出版、1998年
- 宗片邦義『「能・オセロー」創作の研究』勉誠社、1998年
- 宗片邦義『能・狂言研究』私家版、1996年
- ルコント・デュ・ヌイ著(渡部昇一訳)『人間の運命』
(*Human Destiny*)、三笠書房、1999年